

中央公論社

越前竹人形

水上勉

越前竹人形

©一九七二
檢印廃止

昭和四十七年十一月三十日初版
昭和五十年三月二十五日八版

著者 水上 勉

発行者 高梨 茂

印刷所 三陽 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話（五六一）五九二一

振替口座東京二一三四番

越前竹人形

越前（福井県）武生市から南条山地に向つて、日野川の支流をのぼりつめた山奥に、竹神といふ小さな部落があつた。溪谷に落ちこんだ谷間の両側に点々とならんだ、わずかに戸数十七戸の辺鄙な寒村だったが、日本海へ断崖になつてきりたつてゐる南条山脈の山ふところに、まるで忘れられたようにあつたこの部落が、近在の人びとの口の端にのぼつたのは、竹の名所だつたからである。

部落の家々は、それぞれ藁ぶき屋根の母屋と杉皮ぶきの石置き屋根の小舎をもつて細長く溪谷に延びていたが、家々は竹藪にかこまれていた。マダケ、ハチク、モウソウダケ、メダケ、ハコネダケ、イヨダケなどの繁茂した幾区劃もの藪が、約百メートルほどの距離をおいて、家々をとりまいていて、どの家も藪の中にひっそりと隠れてみえた。

竹細工の村であつた。竹ならばどんな種類でもあつた。せまい土地にクロチクなどのめずらしい小藪までもつていたのは、細工物に必要だつたためである。

藪が多いせいでもあるが、一帯は山蔭でもあったので、家々はうす暗く、陰気だった。入母屋造りの屋根が三角型にぴんととがっているのは、雪が多いせいである。一年中部落の屋根はかわいたことがない。部落道の隅にはきのこが生え、かびくさくて、いつもしめっぽかった。

十七戸の家々が、もともと、竹細工をしたわけではなかった。部落の人たちは竹神川とよんでいる溪流にそうした平地に、竹樋で水をひき、水田をつくっていた。斜面につくられた田はどの田も小さく、畳一枚くらいしかないものもあった。水ひきの便のわるいところは畑である。人びとは九十九折の遠い山道をのぼって甘藷、陸稻、甘藍などをつくり、麦もつくった。肥え運びは激しい労働であった。冬は雪山に入って炭を焼くのが習慣である。

ところが、いつからか、部落の人たちは竹栽培に精を出すようになり、武生や福井から買いにくる竹材商に、干竿、釣竿などになる竹を伐り売りするようになった。これが零細な人びとの現金収入になっていった。

大正の初めごろに、この竹神部落で区長をつとめたこともある氏家喜左衛門という者がいた。喜左衛門は幼少時から手先が器用で、裏の竹藪から竹を伐ってくると、ひまにまかせて竹籠、箒、傘骨、団扇骨、茶筌などをつくった。鯖江、武生あたりの雑貨屋が聞き伝えて買いにくるようになった。竹材をそのまま売るのは、せまい土地の藪はやがて絶えてしまう。細工物にして売っ

た方が金にもなったし、藪を守るためにもよかったのである。この喜左衛門のはじめた副業は、やがて、部落全体に波及し、人びとは喜左衛門の小舎にきて細工の手ほどきをうけ、一時は十七戸の三分の二が竹細工に精を出したということである。急傾斜に出来た部落であったから、雪崩^{なだれ}をふせぐために祖先が栽培したと思われる竹藪が、思わぬ副業となつて、竹神の名を近在に知らしめた。

春の雪どけ時がくると、冬の間につくった目籠、箒、釜敷、花筒などを背負うた部落の細工師が、高い南条山脈を越えて、町へ売りにいく姿が見られた。

竹神部落ではじめて竹細工をなした氏家喜左衛門は、早くに妻を失い、一人息子の喜助とふたり暮しであった。三歳の時に死に別れた母の面影は、息子の喜助にはなかった。父親は喜助を、まるでクロチクを育てるようにかわいがつて育てた。

喜左衛門は四尺二三寸しかない小男で、まるで、子供のような軀^{からだ}をしていた。顔も小さく童顔だった。小柄なわりに頭が大きく、うしろ頭のとび出たその頭は、いつもイガ栗頭だったせいもあって、小坊主のようなかんじがしたし、ひっこんだ小さい眼が鋭く光っているのも、細工師らしい風貌といえたかもしれない。その子の喜助もまた父親に似て、そっくりの容貌をしていた。

喜助は背がひくいことで、村人から馬鹿にされた。父親は竹細工師の始祖でもあるから、大びらに嘲笑する者はなかったが、喜助の少年時はすでに隣村の広瀬に分校が出来ていたので、学校

へゆかねばならなかった喜助は、小柄な軀を笑われながら通学した。喜助はそのために、外へ出るのがいやになった。父について、竹細工をならうようになった。父のような立派な細工物をするようになれば、人を見かえすことが出来るのだと喜助は齒を喰いしばっていた。

もともと、喜左衛門も、竹細工をはじめたのは、軀が小さくて、腕力がなかったためである。

炭俵をかついで冬山をのぼる副業に適さなかった。村人たちは、雪の山をこえ、三里も奥の斜面に炭竈すすがまを築いたが、とても、喜左衛門には出来なかった。彼は、小舎の中に藁わらを敷き、綿のはみ出た座蒲団に坐っていっしんに竹細工にはげんだものだ。

器用な喜左衛門の手は、精緻な鳥籠もつくったし、茶筌、花筒、筆立、弁当箱など、調法な台所用品までに及んだ。喜左衛門は、徴兵検査で丙種になった翌年京都に旅をして、竹細工師の家や問屋をたずねて工芸細工を研究した。帰ってくると、器用にそれらを真似て、数十種に及ぶ細工品の雛型ひながたをつくった。部落に藪が多くなったのは、やがて、人びとが喜左衛門に習って細工物に精を出すようになり、その必要上から、材料を豊富にするために、わざわざ土地を開き、それぞれの細工に応じた竹種の藪を育成した結果である。

氏家喜左衛門は、竹藪の中で生きたような男であった。彼の手は子供ののように小さく、細い指をしていただけで、竹にふれると、まるで憑つかれたように、器用に動いた。喜左衛門は大正十一年の秋末に、六十八歳で死んだが、死ぬ間際まで、しめっぱい杉皮屋根の下の作業場で、竹細工

の轆轤ろくろをまわしていた。轆轤とは、自在じざい錐いざなのことであって、竹細工をする者ならば、誰もが手製でもっていなければならない道具の一つである。桎材かしでつくられた心棒に、皮革をまきつけ、横木にこれを通して、鼠歯錐とよばれる刃先錐を心棒の先にとりつけておく。横木を上下させると、自然と心棒が回転し、固い竹材に穴あけをするのに便利のように出来ている。この轆轤をにぎって、小鳥籠をつくりながら、喜左衛門は老衰のために倒れた。

仕事場で物音がしなくなったので、喜助は不審に思って小舎に走り入った。すでにその時は喜左衛門の顔は色がなかった。とろんとした眼をしていた。何やら、口の中でいおうとする言葉がいえないらしく、苦しそうであった。通りかかった隣家の与兵衛という者が駈けこんで、喜助と一しょに、喜左衛門の軀を母屋の奥へはこんだ。床をとって寝かしたが、喜左衛門はぐったりして、伏したまま面をあげなかった。老衰の上に、日ごろから、坐りづめの作業である。下半身が弱っていたのだ。鴉のようにやせ細った小柄な軀は、綿のはみ出た蒲団の上で小さくみえ、喜助は、それが、父親の最期であることを予知した。村人を呼びにいった。十六戸の家から、男女が走りこんできたが、その時はすでに、喜左衛門の臨終だった。しかし、喜左衛門は息をひきとる間際に、苦しそうな声で、喜助、喜助と二ど名をよんで、

「縁先をあげてくれ」

とかすかにいった。喜助がいわれたとおり、大戸のしめてある座敷の縁先に走ってカンヌギをは

ずして戸をあけると、秋末のうす陽のさしたせまい庭がみえ、枯つつじの築山があった。その向うに、これも黄葉のまじりかけたマダケの梢が頭をそろえて風にそよいでいる。

「喜助」

とまた喜左衛門は息子をよんだ。

「ええか、マダケは十一月に伐れ、ええか」

と喜左衛門は力のない声でいった。それだけいうと、やがて、こくりと咽喉を一つ大きく音だててこと切れた。遺言というものはなかった。ただ、マダケは秋末の十一月に伐れといっただけであった。

村人たちはこの最期をじっとみていた。竹神部落の副業である細工物の、いわば恩人でもある喜左衛門の最期に、誰ひとり涙を流さないものはなかったが、最後にのこした喜左衛門の言葉が理解できたのは息子の喜助だけである。

普通、竹材商は竹を仕入れる場合、藪主のところへくると、春すぎにきてくれといわれた。春伐りの竹を買われるわけであった。竹は春すぎに伐ると根元は夏をむかえてすぐに枯れはじめ。そのために藪の肥料になってはたの生竹の助けになる。肥料を少しでも惜しんだ藪主が、同じ伐るなら春夏に伐ろうとしたのはそのためであるが、喜左衛門だけはちがっていた。秋末に伐る習慣だった。秋冬に伐ると、地めんは冷たい。伐った根はそのまま生きていた。藪としては死

根にそれだけ肥料をとられるわけで、損失といえた。しかし、喜左衛門は、あくまで細工師であった。細工用の竹は冬伐り物にかぎると教えたのである。

伐った竹材は、つしとよばれる三角屋根の屋根裏にならべておく。すると、囲炉裡の煙でくすぶり、自然と煤竹すすたけになって乾燥される。堅牢度は倍加する。鳥籠や、花筒、菓子器など、堅牢な竹を必要とする細工ものは煤竹にかぎった。喜左衛門は藪よりも、細工物に重点を置いていたのであった。

喜助は、死ぬ間際まで、十一月に竹伐りをすませろ、と指示した父親の根性にうたれた。それだけいって眼を閉じた安らかな死に顔をみていると、かなしみよりも、この父親に連れられて、京や大阪の竹藪を見て歩いた旅の日がうかんで慟哭どうきくした。

「お父つぁんはな、竹の身みやった。喜助、わいも、お父に負けんように、精出さんならんぞ。ええか」

わきにいた与兵衛が皺しわくちやの顔に涙をうかべて、鼻汁をすすりながらいった。

「あしたからは、お父はおらんぞ。お父は死んでしもた。作業場はわいのもンや。生きとる時はさわらせなんだ道具も、みんなわいのもンや。轆轤ろくろも、万力まんりきも、剝小刀くろこがたなも、三角刀も、みんなわいのもンや。お父の道具は越後の三条まで行って買うてきたええ道具や。わいはその道具をもろうて、あしたから精を出せ、ええか」

風のつよい日で、喜助の家のまわりの藪の梢は葉ずれの音をたててはげしくゆれていた。その音は、七十年間、竹細工に生きた喜左衛門の死を憐^{あわれ}んで泣いているようにきこえた。

氏家喜助が二十一歳の十一月末のことである。

喜左衛門の葬式は、竹神に寺はなかったので、部落が永代菩提寺にしているひと溪向うの広瀬村の瑞泉寺^{ずいせんじ}で行われた。部落の者は全員そろって参列したが、区長の与兵衛の意見で、喜左衛門の墓は、菩提寺に置かず、喜助の家のうしろにある竹藪の丘の、わずかばかり陽のあたる平坦地の一郭を敷地にして設置されることになった。それは、竹神部落の功労者として、喜左衛門の亡骸^{なきがら}を村にそのまま置いておきたいと念じた部落の人たちの総意でもあった。「竹細工師 氏家喜左衛門之墓」という石塔が建てられたのは、粉雪の降りしきる十二月のことであった。

この石碑が出来てまもないある日の、小雪のふる午^{ひる}すぎ、喜助が、父の生前坐っていた仕事場の「座」に火鉢を置き、小柄な軀をすくめて、無心に鳥籠づくりの轆轤をまわしていると、小舎の入口からケツトをかぶった三十に近い年ごろと思われる和服にもんぺ姿の女が覗^{のぞ}いた。

「ごめんくださりませ」

とその女はひくい声でいい、かがみ腰になって覗いている。

「氏家喜左衛門さんのおうちでござりまするか」

とおちついた声で喜助をみて訊いた。喜助はびっくりした。手を休めて女の方をみた。村の女でないことはひと目でわかった。紅い襦袢じゅばんの襟えりをのぞかせた女には都会の匂いがあった。

「左様さようです」

と喜助は固くなっていった。ところが喜助は瞬間、どこかでこの女をみたことがあるような気がした。しかし、喜助には思いだせなかった。女はうす暗い喜助の仕事場を奥の方まで覗くようにして敷居際にくると、細い眼をしばたかせ、にっこりした。整った顔だだった。細い糸のような眼をしている。丸顔のぼっちゃりした愛くるしい顔だ。それは、喜助にはやさしくみえた。喜助は赧あはくなった顔にはにかみをうかべてだまっていた。

「あんさんは息子さんでござりますか」

女はきいた。

「そうです」

と喜助はこたえた。女はなつかしげな眼もとになり、

「お父さんにお世話になったもんでござります。お父さんがお亡くなりやしたとききまして、お墓まいりによせてもらいましたんです。お墓はどこでござりますやろ」

ときいた。

喜助は、この女が父に世話になったときいて、はっとした。どこかでみたと思ったのは、それ

では父と一しょに武生か鯖江へいったときに、会っている女ではなからうか。しかし、どうしても、喜助にはいまい思ひだせないのだった。

「どなたはんどすか」

と喜助は勇気をだしてきいてみた。

「あてどすか」

と女はちょっと口ごもったが、

「名アをいうほどのもんやござりまへん。どうぞ、お墓をお教えやしとくれやす」といった。

喜助は、いずれは、武生か鯖江か、福井あたりの、荒物屋か玩具屋のお上かみであろうと思った。細工物を卸す得意先には、よくこのようなお上さんがいることも知っている。父は、春がくると、商取引もあって、それらの問屋へ旅していったのだった。二日も三日も帰らないことがあった。喜助もそれらの町々へつれられていったこともあるが、いずれも少年時だったので、会った人のことは忘れてしまっていた。この女も、きっと父の商売筋の知り合いにちがいないと思った。

それにしても、名前をいわないのが変だと思えたが、喜助は、遠い雪道を歩いて、わざわざ墓参に来てくれたのだと思うと、茶なりと出さねばなるまいと思って、この女を母屋に案内した。

女は遠慮がちに、そのようなもてなしは結構だといいいながらも、喜助の案内する母屋へ、雪の

右ころ道を横切ってついできた。喜助は、背のたかい、その女のふっくらとした胸に、ふとたえて感じたことのない母の匂いをまさぐる眼つきになっていた。居間へあがると、喜助はふるえる手つきで、釜の湯をついで番茶を入れた。そうして女の前へ馴れぬ手つきでさしだした。

「なんで、お名前をいうてもらえへんのですか」

と喜助はきいた。女はやさしくみえる。亡父と単なる知己ではないように思えたので、喜助は勇氣をだしてきいたのだった。

「あてどすか」

と女はいつて、しばらく顔をうつむけてためらっていたが、

「芦原あわらの玉枝どすねや」

といった。女はそういつたことでようやく勇氣が出たように、

「あんさんは喜助さんでおいしいやすのどっしゃろ、お父さんからようおはなしはきいてましたわ。うちは、あんさんに昔会うてますのどっせ。あんさんがまだ小さい時どしたわ」

と眼をほそめていつた。

「お父さんはほんまにええお人どしたなア。芦原へおいでやすたんびによつてくれはりました」

喜助は、この女が芦原で何をしている女であるか判断が出来なかった。そういえば、父と一しょに芦原へ行ったことはあった。芦原は越前に一つきりの温泉町である。この竹神から武生を經

て、福井市に出て、そこから三国行きの馬車にのりかえると、その温泉町につく。旅館の数も多い。加賀の山代やましや片山津かたやまつとならんで北陸の温泉場としては由緒のふかい町である。喜助も父と何かの商用で出かけた時に、一泊した。しかし、大きな旅館の一室に泊って、広い庭をみた記憶と、板ばりの湯槽で父の背中を流した記憶があるだけである。女の記憶はなかった。だが、喜助は、女の顔をどこかでみた確信があったから、それでは、その時にこの女をみたのであろうかと、思いなおさずにはおられなかった。

「思ひだしとくれやしたか」

と玉枝はいった。

「いいえ、思ひだせしまへん。小っちゃい時に、お父つあんは、芦原へも京や大阪へもつれてつてくれはりましたけど、わたしには女おなはんの記憶は何んもあらしまへん。あるもんは竹藪たけくさばかりですねや。宇治の孟宗藪もうそうくさ、小栗栖おぐりすの真竹藪、藪くさばかり思ひだされますのんや……」

「へーえ」

と、玉枝は白い歯をだしてこの時またにっこり笑った。

「あんさん、藪くさばかりおぼえてて、うちのことはおぼえてとおくれやさしまへんだんか。いややわ……」